

たじみん昼話 145

学校で体験・実験⑩ 死海の水 水も色々

今回は、水をテーマに、死海の水、アイスランドの水、大分県の水の3つを展示した。

死海の水は、岐阜県立博物館から展示したいとの要請があって、貸し出したものだ。ただし、イスラエル側ではなくパレスチナ側の方で採取してきたものだ。

採取した当初は、結晶ができておらずきれいな状態だったが。濃度が高いためだろう、年月ともに結晶化が進み、塩の欠片が目立つようになった。ただし、顕微鏡で観察する限り、菌は見当たらない。

①アイスランドの水

アイスランドで売っていた水だ。

②大分県の水

I園が販売していた水だ。

※ふたを開けて飲まないでね。

③死海の水について

死海は、イスラエルとヨルダンの国境にある、南北60km、東西17kmの細長い湖だ。人が浮き輪もなしにプカプカと浮かんで、本や新聞を読んでいるイメージがあると思うが、実際行くとその通りの風景が見られる。

地球上で最も標高が低い海拔-423mに死海はある。この標高のため、世界中のどこよりも酸素濃度が高い。蒸発した水分がフィルターとなって紫外線がほとんど届かないので、日焼けの心配もあまりないのだ。死海に含まれる「臭素」には精神安定作用があるらしく、心が落ち着くと言われている。

体が浮かぶ秘密は塩分濃度だ。約30%だ。1リットルの水に300gの塩が溶けているのと同じ濃度だ。普通の海水が塩分濃度約3%程度なので、約10倍の濃さだ。あまりに高い塩分濃度のためほとんどの生物は生息できず、それが「死海 (Dead Sea)」という名前の由来となっているのだ。

海水の主成分は「塩化ナトリウム」だが、死海の主成分は豆腐の苦汁に使われる、「塩化マグネシウム」だ。舐めると辛いというより苦い味がする。また手触りは、トロリとしている。64種類の天然ミネラルが溶け込んでいるからだろうか。

